

# 國學院大學學術情報リポジトリ

京阪式アクセントと東京式アクセントの混在する方言アクセント：  
三重県鈴鹿市の3拍語アクセント節から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹内, はるか メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000938">https://doi.org/10.57529/00000938</a>

# 京阪式アクセントと東京式アクセントの混在する方言アクセント －三重県鈴鹿市の3拍語アクセント節から－

竹内 はるか

キーワード：東西アクセント境界地帯、三重県鈴鹿市、3拍語、共通語化、内的変化

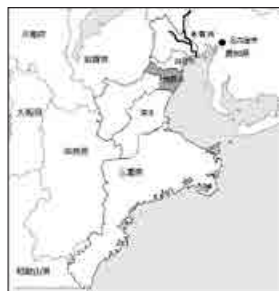
## 1. はじめに

本稿では、三重県鈴鹿市方言の3拍語のアクセント節（名詞、動詞、形容詞）における京阪式アクセントから東京式アクセントへの変化の実態について、式の対立と型の相の対比から述べる。

三重県鈴鹿市は、服部（1930）の「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」や丹羽（2000）に述べられているように伝統的には京阪式のアクセントの地域である。しかし、近年竹内（2015）（2017）で報告したように、鈴鹿市では伝統的京阪式の体系を保持する話者と東京式アクセントと似た体系を持つ話者が混在する。しかも、高年層から若年層にかけての広い世代でそのような話者が観察される。そのため、同一世代での個人差も大きいというのが当該方言の特徴であるといえる。このような実態は、従来報告されてきた都市化による急激な変化、すなわち人口増加や就業や修学による共通語化とは異なる。要因としては、地理的背景から、当該地域は長年にわたって京阪式アクセントと東京式アクセントが交わる地点で、両アクセントの接触があったこと、近代化という社会的背景から、緩やかに一方の影響が強まったり、限定的に伝統的な方言勢力が強固に保たれたりする地域が混在することによって、このような混合タイプが幅広い年層にわたって存在することになったと解釈する。近隣の地理に目を転じると、名古屋により近い四日市市では、東京アクセント化が大きく進んでおり、鈴鹿市より南の名古屋方面から遠い松阪市では、伝統的なアクセントが保持される。三重県の地図は以下

の地図1の通りである。

本研究では、拍数が比較的長く安定性があり、また古い文献による記録が残されており先行研究との比較も行える3拍のアクセント節について述べる。



地図1 三重県地図

当該方言のアクセントは、高起式、低起式という式の対立でみると以下の三つのタイプに解釈することができる。

(a) 式の対立と下がり目の位置で解釈できる、京阪式アクセントに似る伝統タイプ

(b) 式の対立が曖昧で、拍数、型によって解釈の仕方が異なる混合タイプ

(c) 式の対立がなく、下がり目の位置のみで解釈できる東京式アクセントに似るニュータイプ

(c)で示したニュータイプについては、式の対立がなく、2拍名詞の類の統合の相やそれに所属する語のアクセント型は東京アクセントに近いが、すべてのアクセント節が東京アクセントになったわけではないので、ここではニュータイプとしている。

本稿では、当該地域のアクセントを上記の三つのタイプにわけ、3拍語アクセント節の実態を述べる。

(a)伝統タイプ、(b)混合タイプは式の対立の他にもそれぞれ特徴がある。(a)伝統タイプはそれぞれ類別語彙の型の相や所属語もほぼ京都市方言と同様に観察される。それに対し、(b)混合タイプは、東京式アクセントと共通する特徴が、様々な相で現れ、伝統的アクセントを浸食する構図をとる。(b)混合タイプにおいて、どの程度東京式アクセントが現れるかは、年代差、個人差、場面差、意識差などによって異なり、いろいろな変種が観察される。

本研究では、(b)混合タイプのなかでも(a)伝統タイプに近いものを(b1)「混合タイプ伝統より」、より東京式のニュータイプに近いものを(b2)「混合

タイプ東京より」とする。

調査は2008年9月～2016年8月に対面式で行った。動詞と形容詞は共通語での文例を示し、それを普段の言い方でどう言うかを尋ねる方法で行った。話者は、15～86歳の鈴鹿市生え抜きの話者42名で、特に本稿では、(a)伝統タイプの話者としてC.S (1933年生まれ、女性)を、(b1) 混合タイプ伝統よりの話者としてK.I (1985年生まれ、女性)、(b2) 混合タイプ東京よりの話者としてS.T (1988年生まれ、男性)、(c)ニュータイプの話者としてA.I (1997)の結果を中心に示す。

本稿では3拍の名詞125語、動詞75語、形容詞25語について詳述する。調査語彙は平山 (1960) による。

## 2. 名詞の型の相

3拍名詞のアクセントについて、まずに式の対立、続いて安定して古相が観察される型とタイプによって異なる相が観察される型についてそれぞれ詳述する。

### 2.1 式の対立

式の対立については、京都で低起式平板型、東京で平板型になる語を表1に、京都で高起式平板型、東京で平板型になる語を表2に示す。(a)伝統タイプは対立を保持している相、(b)混合タイプは曖昧になっている相、(c)ニュータイプは式の対立を示さない相が観察される。(c)ニュータイプにおいても、伝統タイプや混合タイプと同様音声的相としては [○○○▶] が観察されるものの [●●●▶] と音韻的対立は示さない。

(b1) 混合タイプ伝統よりの話者においては、表1の「鰻が」など伝統的には低起式の [○○○▶] となる語を安定して [●●●▶] で発音するなど伝統的な式とは異なる発音の語が観察される。また、(b2) 混合タイプ東京よりの話者において「鼠が」「狐が」など [●●●▶]、[○○○▶] のどちらで発音してもよい語が観察される。

(c)ニュータイプでは表1のとおり伝統的には低起式で発音される語のほとんどが、[○○○▶~●●●▶]で観察され、低起式と高起式の混同がみられる。伝統的には高起式であった語については一拍目が若干ゆるんで観察されるものの、低起式の語より安定して京都アクセントに近いアクセントが観察される。ただし、少ない語数ではあるが、伝統的に高起式の語において、(b2)混合タイプ東京よりの音声的相として[○○○▶]が観察された。具体的には「桜が」、「机が」などが[●●●▶~○○○▶]で観察され、高起式と低起式の混同がある。

これらのことから、低起式の音声的な相が高起式の音声的相より早く変化していることがうかがえる。

表1 京都アクセントが低起式平板型の語

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ伝統より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント	
○○○▶	1	昔	●●●▶	◎●●▶~●●●▶	◎●●▶~●●●▶	○○▶~●●●▶	○●●▶	
	6	兎	○○▶	○○▶	○○▶	○○▶~●●●▶		○○▶~●●●▶
		鯉	○○▶	○○▶	◎●●▶~●●●▶	○○▶~●●●▶		○○▶~●●●▶
		狐	○○▶	○○▶	○○▶~◎●●▶	○○▶~●●●▶		○○▶~●●●▶
		スズメ	○○▶	○○▶	○○▶	○○▶~●●●▶		○○▶~●●●▶
		背中	○●▶	○○▶~○●▶	○○▶	○○▶~●●●▶		○○▶~●●●▶
		鼠	○○▶	○○▶	○○▶~◎●●▶	●●▶		●●▶
	裸	○○▶	○○▶	○○▶~◎●●▶	○○▶~●●●▶	○○▶~●●●▶		
	ヒバリ	○○▶	◎●●▶~●●●▶	◎●●▶~●●●▶	○○▶~●●●▶	○○▶~●●●▶		
	誠	○○▶	○○▶	NR	○○▶~●●●▶	○○▶~●●●▶		
	ミミズ	○○▶	○○▶	○○▶	○○▶~●●●▶	○○▶~●●●▶		

表2 京都アクセントが高起式平板型の語

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ伝統より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント	
●●●▶	1	欠伸	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶
		筏	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		錨	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		田舎	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○○○▶～●●●▶	
		鱈	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		飾り	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		鹽	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		形	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		鯉	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		音物	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○○○▶～●●●▶	
		鎖	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		轡	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		車	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		煙	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		子牛	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		氷	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		小山	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		衣	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		魚	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		舅	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		印	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		使い	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		机	●●●▶	○○○▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○○○▶～●●●▶	
		隣	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		膠	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		喪言	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		初め	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		鼻血	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		庇	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		額	●●●▶	○○○▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		羊	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
		都	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	
錨	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶			
間	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶			
桜	●●●▶	○●●▶～●●●▶	○●●▶～●●●▶	○○○▶～●●●▶	○○○▶～●●●▶			

## 2.2 古相を保つ型

表3は京都アクセントも東京アクセントも頭高型で観察される語を示したものである。京都アクセントと東京アクセントが同じ型の語、たとえばどちらも頭高型である語「えくぼが（2類）」「鮑が（3類）」「鰈が（5類）」などは、表3のとおり全タイプを通じほぼ安定して頭高型のアクセントが観察される。ただし、相違点として(b)混合タイプ、(c)ニュータイプにおいては東京、京都のいずれとも異なる中高型が音声的な姿として観察された。例としては「枕が」、「涙が」が【●○○▶】と【○●○○▶】でゆれが観察される。今回表に示していない(a)伝統タイプのM.S（1931年生）、(b)混合タイプのM.H（1985年生）、R.I（1994年生）においては、「朝日が」は【○●○○▶】と観察された。「朝日が」、「枕が」、「涙が」はいずれも名古屋で○●○○▶となる語で

ある。この例は、同じ東京式アクセントであるが、東京とは異なる、名古屋アクセントに観察された例といえる。

表3 京都アクセント、東京アクセントともに頭高型の語

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ伝統より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント
●○○▷	2	えくぼ	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷
	3	鮑	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		二十歳	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	4	嵐	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		紅葉	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		ワラビ	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	5	朝日	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		命	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		鯨	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		胡瓜	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		ざくろ	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		姿	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		涙	●○○▷	●○○▷	●○○▷/○●○○▷	●○○▷	
		錦	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		枕	●○○▷	●○○▷/○●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		眼	●○○▷	N R	●○○▷	●○○▷	

表4は京都アクセントで中高型の語を示したものである。京都アクセントで中高型の語例は、当該方言では (b2) 混合タイプ東京よりであっても中高型が比較的安定して観察される。東京アクセントの型にかかわらず、古相を保持しているといえる。

表4 京都アクセントが中高型の語

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ伝統より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント	
○●○○▷	2	翼	●●●▷	○●●▷~●●●▷	○●●▷~●●●▷	○●●▷~●●●▷	○●●▷	
		トカゲ	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
		ムカデ	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
	7	後ろ	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
		鯨	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●●▷~●●●▷		
		葉	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
		タライ	○●○○▷	○●●▷~●●●▷	○●○○▷	○●●▷~●●●▷		
	6	2	緑	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		○●○○▷
		高さ	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
		狸	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
		蚕	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		
		7	兜	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		○●○○▷
			便り	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		○●○○▷
			椿	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		○●○○▷
		2	病	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		○●○○▷
			毛抜き	○●○○▷	○●○○▷	○●○○▷~●●●▷		○●○○▷
			二つ	●●○○▷	○●○○▷	○●○○▷		○●○○▷
二人	●●○○▷	○●○○▷	○●○○▷~●●○○▷	○●○○▷/○●●▷				

(c)ニュータイプにおいては、伝統的な中高型から東京アクセントと同じ型

へそれぞれ変化した相が観察される。ただし、やはり [○●○▷] は他の型に比べ比較的安定して伝統相を保っているといえる。下の表5、表6はそれぞれ京都アクセントが○●○▷型の語、●○○▷型の語におけるニュータイプ9名（いずれも1992~1993年生、生え抜きの話者）のアクセントを示したものである。網掛けで示した部分は京都アクセントと同じ型で観察された語である。

表5をみるとわかるとおり、伝統的な [●○○▷] が観察される語は、東京アクセントで●○○▷型である語のみである。それに対して、表6のとおり、京都アクセントが [○●○▷] となる語についてはニュータイプにおいても網掛けで示した通り、伝統的な○●○▷が観察される。(b2) 混合タイプ東京よりの結果もふまえると、当該地域において○●○▷型は比較的安定性が高い型であると考えられる。

京都アクセント	類	アクセント 筋例	①H.A	②K.M	③Y.E	④S.O	⑤T.T	⑥M.N	⑦R.F	⑧K.K	⑨M.H	東京 アクセント	
●○○▷	5	油	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷	
		簾	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	NR	NR	◎●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷		◎●●▷
		柱	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷		◎●●▷ ○●●▷
	3	鮑	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷
		二十歳	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	5	朝日	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷	
	3	力	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷
		男	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	
		鏡	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	
		刀	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	
		袋	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	
	3	小麦	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷ ●●●▷	◎●●▷
	5	心	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷ ○●●▷	◎●●▷	◎●●▷



京都 アクセント	類	アクセント 節例	①H.A	②K.M	③Y.E	④S.O	⑤T.T	⑥M.N	⑦R.F	⑧K.K	⑨M.H	東京 アクセント	
○●○▷	2	トカゲ	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	
		ムカデ	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷		
	7	後ろ	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷		
		鯨	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷	○●●▷		
	7	蚕	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷		●○●▷
		兜	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷		
		便り	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷	●○●▷		
	2	毛抜き	●●●▷ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷/ ●●●▷	○●●▷	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷		○●●▷
		二つ	○●●▷ ●●●▷	○●●▷	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷		
		二人	○●●▷ ●●●▷	○●●▷ ●●●▷	○●●▷	○●●▷ ●●●▷	○●●▷ ●●●▷	○●●▷/ ○●●▷	●●●▷ ○●●▷	○●●▷	○●●▷		

### 2.3 タイプの差が観察される型

東京で○●●▷となる語を表7に示した。(a)伝統タイプでは、その型で観察される語はみられない。それに対して、(b)混合タイプでは、東京式アクセント化が進み尾高型 [○●●▷～●●●▷] が観察される。さらに(c)ニュータイプではほとんどの語が尾高型で観察される。

特に、京都アクセントで頭高型とされる語は、(b)混合タイプにおいて話者、語によって [○●○▷] と [●○○▷] と異なったアクセントが観察されており、個人内でも [○●○▷～●○○▷] でゆれる語が多く観察される。

平山 (1960) において京都アクセントで [●○○▷] と観察されている語の多くは、金田一 (1974) において京都で [●○○]、大阪で [●●○] であるといわれる。また、楳垣 (1957)、池田 (1951)、村中 (1999)、(2005) で述べられているように、京阪式アクセントにおける●●○型は安定性が低く、3拍のうちどこか1拍のみが高い [○●○] や [●○○] への変化が進むことが予想されている。このような京阪式アクセントの内的変化が、(b)混合タイプにおける [○●○▷] と [●○○▷] との混在がみられる要因であると考えられる。

さらに、(b2) 混合タイプ東京よりでは、このような京阪式アクセントの内的変化が観察されるのに加え、東京式アクセント化が進む相も観察されることから、さらに複雑な様相を示す。

(a)伝統タイプで●●○▷型が観察されたのは、「小豆」「二つ」「二人」「庭師」の4語であった。(b2) 混合タイプ伝統よりは、1985年生まれと比較的若い世代でも●●○▷型が観察されるものの、[●●○▷]のみが安定して観察されることはなく、4語とも音声的相として○●○▷も観察される。

(b2) 混合タイプ東京よりにおいては、先述の京阪式アクセントの内的変化が起きたアクセントと、東京式アクセント化した尾高型が混在しているため、語によって、個人によって異なるアクセント型が観察されると考えられる。どの語において、どちらの型が三重県方言アクセントの優勢な型となるかは今後の継続的な調査を要する。

表7 東京式アクセントで尾高型となる語のアクセント

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ伝統より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント
●●●▷	1	麓	●●●▷	○●○▷/●●○▷~ ●●○▷	○●○▷/●●○▷~ ●●○▷	●●○▷~●●○▷	○●●▷
		恨み	●○○▷	●○○▷	●○○▷	○●○▷/●●○▷	
	4	曆	●○○▷	●●○▷~●●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	
		林	●●●▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	
●○○▷	2	小豆	●●○▷	●○○▷	●○○▷	●○○▷~●●○▷	○●●▷
		3	力	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	4	頭	●○○▷	○●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	
		イタチ	○●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	
		扇	●○○▷	○○○▷	○○○▷	●●○▷~●●○▷	
		男	●○○▷	●○○▷~○●○▷	●○○▷	●●○▷~●●○▷	
		面	●○○▷	NR	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	
		鏡	●○○▷	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
		仇	●○○▷	●○○▷~○●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	
		刀	●○○▷	○●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	
		瓦	●○○▷	●○○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	
		宝	●○○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	
		袴	●○○▷	○●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷	
		東	●○○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	
	光	●○○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷		
	響き	●○○▷	●●○▷~●●○▷~ ●○○▷	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷		
	袋	●○○▷	○●○▷	○●○▷	●●○▷~●●○▷		
	筵(ムシロ)	●○○▷	NR	●●○▷~●●○▷	●●○▷~●●○▷		
	5	襷	●○○▷	●○○▷	●○○▷	●●○▷~●●○▷	
	○●○▷	2	昨夜(コノベ)	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
毛抜き			○●○▷	○●○▷~●●○▷	○●○▷	○●○▷	
○●○▷	2	二つ	●●○▷	○●○▷	○●○▷	○●○▷	○●●▷
		二人	●●○▷	○●○▷~●●○▷	○●○▷	○●○▷/●●○▷	

### 3. 動詞の類の統合と型の相

当該地域における3拍動詞終止形のアクセントは、伝統タイプ、混合タイプともに三つの型の対立が観察される。(1)●●●：高起式で下がり目のない型、(2)○○●：低起式で下がり目のない型、(3)○●○：低起式で2拍目の後ろに下がり目がある型である。それぞれのアクセント型が観察される語をみると、

- (1)●●●で観察されるのは主に1類の語、2類の五段活用の語である。
- (2)○○●で観察されるのは主に3類の語である。
- (3)○●○で観察されるのは主に2類の一段活用の語である。

京都アクセントで●●●の語は、全タイプともに[●●●～○●●]で観察される。特に(b)混合タイプ、(c)ニュータイプでは1拍目は1拍目がゆるんで観察されることが多い。京都において高起式平板型で観察される語のうち、1類Bの語、「明ける」、「枯れる」などは名古屋では○●○型で観察される。しかし、当該地域において1類Bの語を○●○で発音する話者は全タイプをとし観察されなかった。

京都では2類の一段活用の語は○○●で観察されるが、丹羽(2000)にあるように三重県鈴鹿市においては2類一段活用の語は、伝統的に○●○型で観察される。したがって、当該地域の(a)伝統タイプ、(b)混合タイプともに先行研究にあるとおりの伝統相を保持しているといえる。

それに対して、(a)伝統タイプと(b)混合タイプ、(c)ニュータイプで大きく異なるのは、京都において○○●型で観察される2類B以外の語である。表8にあるように具体的には「歩く(3類)」「入る(3類)」「遊ぶ(1類)」は、(a)伝統タイプでは○○●型で観察される。しかし、(b)混合タイプ、(c)ニュータイプでは○●○で観察される。「歩く」以外の語は、東京アクセント型に変化したのであればそれぞれ[●○○：ハイル](入る)、[○●●：アソブ](遊ぶ)で観察されるはずである。しかし、いずれもそのような変化は起きておらず、すべて○●○型で観察される。このことから、当該地域において○○●型は○●○型に統合する傾向があることがわかる。

特に東京アクセントに近似する◎ニュータイプでは、○○●型が観察されず、すべて○●○に変化している。

表8 京都アクセントが○○●の動詞

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ京都より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント
○○●	1A	遊ぶ	○○●	○○●	○○●	○○○	○○●
	1B	植える	○○●	○○○	○○○	○○○	
		捨てる	●●●	●●●～◎●●	●●●～◎●●	○○○	
	2B	生きる	○●○	○●○	○●○	○●○	○○○
		起きる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		落ちる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		掛ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		覚める	○●○	○●○	○●○	○●○	
		建てる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		付ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		溶ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		撫でる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		逃げる	○●○	○●○	○●○	○●○	
	晴れる	○●○	○●○	○●○	○●○		
	3	歩く	○○●	○○●	○○○	○○○	
		隠す	○○●	○○●	○○○	○○○	
	3	入る	○○●	○○●	○●○/○○●	○●○	

#### 4. 形容詞の類の統合と型の相

表9は3拍形容詞の終止形を示したものである。

表9 3拍形容詞のアクセント

京都アクセント	類	アクセント節例	伝統タイプ	混合タイプ京都より	混合タイプ東京より	ニュータイプ	東京アクセント	名古屋アクセント
●○○	1	赤い	●○○	●○○	○●○	○●○	●●●	●○○
		浅い	●○○	●○○	●○○	○●○		
		厚い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		甘い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		荒い	●○○	●○○	●○○	○●○		
		薄い	●○○	●○○	●○○	○●○		
		遅い	●○○	●○○	●○○	○●○		
		重い	●○○	●○○	●○○	○●○		
		堅い	●○○	●○○	●○○	○●○		
		軽い	●○○	●○○	●○○/○●○	○●○		
	暗い	●○○	●○○	●○○/○●○	○●○			
	速い	●○○	●○○	●○○	○●○			
	2	熱い	●○○	●○○	●○○	○●○	●●○	
		黒い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		白い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		高い	●○○	●○○	●○○/○●○	○●○		
		近い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		強い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		長い	●○○	●○○	○●○	○●○		
		早い	●○○	●○○	○●○	○●○		
低い		●○○	●○○	○●○	○●○			
深い		●○○	●○○	○●○	○●○			
古い	●○○	●○○	○●○	○●○				
弱い	●○○	●○○	○●○	○●○				
2	多い	●○○	●○○	●○○	○●○	●○○		

表9で示すとおり3拍形容詞の京都アクセントは1類、2類ともに●○○とされている。鈴鹿市においても、(a)伝統タイプや(b1)混合タイプ伝統より、すなわち高年層や古相を保つ若い世代では「赤い」「白い」など1類、2類ともに●○○で観察される。ただし、(b2)混合タイプ東京よりの話者や(c)ニュータイプにおいては1類、2類ともに○●○型で発音する語が観察される。特に、式の対立を保持しておらず、異なる拍数や品詞で共通語アクセント化が進んでいる(c)ニュータイプの話者においては1類、2類ともに○●○のみが観察された。

芥子川(1983)にあるように、名古屋では東京のアクセントと異なり3拍形容詞は1類、2類ともに○●○で発音される。3拍形容詞・終止形のアクセント

セントだけをみれば当該地域の形容詞アクセントは名古屋アクセントの方向に変化しているように見える。名古屋アクセントへの変化が進むのかを検証するために、以下表10～13に形容詞の活用形について示す。

以下、表10～13の東京アクセントは『NHK日本語発音アクセント新辞典』、名古屋アクセントは鏡（1961）、芥子川（1983）、『現代日本語方言大辞典』による。

表10 3拍形容詞1類「甘い」・活用形

	東 京	M.N(1992年生)	S.O(1993年生)	M.H(1992年生)	Y.E(1992年生)	名古屋
甘い	○●●	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
甘かった	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●●○○
甘ければ	○●○○○	◎●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●●○○
甘くなる	○●●●○	◎●●●○	◎●●●○	○●●●○	○●●●○	○●●●○

表11 3拍形容詞1類「重い」・活用形

	東 京	M.N(1992年生)	S.O(1993年生)	M.H(1992年生)	Y.E(1992年生)	名古屋
重い	○●●	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
重かった	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●●○○
重ければ	○●○○○	◎●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●●○○
重くなる	○●●●○	◎●●●○	○●○○○	○●●●○	○●●●○	○●●●○

表12 3拍形容詞2類「広い」・活用形

	東京	M.N(1992年生)	S.O(1993年生)	M.H(1992年生)	Y.E(1992年生)	名古屋
広い	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
広がった	●○○○○	●○○○○	○●○○○	○●○○○	●○○○○	○●●○○
広がれば	●○○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●○○○	○●●○○
広くなる	●○○○○	●○○○○	○●●●○	○●○○○	●○○○○	○●●●○

表13 3拍形容詞2類「安い」・活用形

	東京	M.N(1992年生)	S.O(1993年生)	M.H(1992年生)	Y.E(1992年生)	名古屋
安い	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
安かった	●○○○○	●○○○○	◎●○○○	○●○○○	●○○○○	○●●○○
安ければ	●○○○○	●○○○○	○●○○○	○●●●○	●○○○○	○●●○○
安くなる	●○○○○	○●○○○	◎●●●○	○●○○○	○●○○○	○●●●○

特に「-ナル」形に着目すると、鈴鹿市ニュータイプは東京と同じで1類 [○●●●○] / 2類 [○●○○○] と対立ありの話者が多い。それに対し、名古屋鈴鹿市の伝統タイプでは1類、2類の対立はない。このことから、当該地域の形容詞は名古屋ではなく東京アクセントの方向への変化が進んでいることがわかる。

## 5. まとめ

3拍のアクセント節の特徴をまとめると次のようになる。

名詞では、(b)混合タイプ、(c)ニュータイプで(1)特に低起式平板型の式の対立が曖昧になる。(2)○●○▷型は比較的古相を保つ傾向にある。(3)東京式アクセントと同じ型で観察される語が混在しているという、三つのことが明らかになった。また、動詞では、○○●と●●●の対立が早く失われ、○●○に統合する傾向が、形容詞は●○○から○●○への変化する傾向があることが明らかになった。品詞全体を通し当該地域における○●○型は安定した型であるといえる。

当該地域の(b)混合タイプ、(c)ニュータイプで行われる名詞アクセントから、当該地域では内的変化と共通語化があわさった変化が起きていることがわかる。

また、形容詞が1、2類ともに中高型となるのは名古屋アクセントの特徴であるが、過去形や、「-ナル」形など終止形以外のアクセントをみると、それぞれのアクセントは名古屋ではなく東京アクセントと同じであることがわかった。動詞においても、名古屋 (○●○) と東京 (○●●) で異なるアクセントが行われるとされる1類の一段活用の語「借りる」「枯れる」などは、(c)ニュータイプにおいてはいずれも東京アクセントと同じ○●●となる。したがって、当該地域で起きている共通語化は、東京アクセントの影響をうけたものであると考えられる。

名詞では●●○と○●○の対立は失われる傾向にあるが、動詞では○●○は●●○とはならず第1拍の低は保たれる。音声的には低でなければならな

いが、音韻論的に対立する●●○はない。このことから、用言では式の対立はあるが、音韻論的にはそれほど機能していないと考えられる。

### 参考文献

- 池田要(1951)「近畿アクセントの体系」『国語アクセント論集』法政大学出版局
- 楳垣実 (1957)「大阪方言アクセント変化の傾向」『近畿方言双書 方言論文集』2 近畿方言学会
- NHK放送文化研究所編 (2016)『NHK日本語発音アクセント新辞典』NHK出版
- 鏡味明克 (1961)「愛知・岐阜」『方言学講座』第2巻 東京堂出版
- 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- 芥子川律治(1983)「愛知県の方言」『中部地方の方言』(「講座方言学」6) 国書刊行会
- 竹内はるか (2015)「三重県鈴鹿市のアクセントの研究」『國學院大學大学院紀要－文学研究科―』第46 輯 國學院大學大学院
- 竹内はるか (2017)「三重県鈴鹿市における用言の活用形のアクセント」『國學院大學大学院紀要－文学研究科―』第48輯 國學院大學大学院
- 西宮一民 (1961)「方言の実態と共通語化の問題点 三重・奈良・和歌山」東条操監修『方言学講座 第三巻 西部方言』東京堂
- 服部四郎 (1930)「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』第3輯 岡書院
- 平山輝男・丹羽一彌ほか (2000)『日本のことばシリーズ24 三重県のことば』 明治書院
- 平山輝男編 (1960)『全国アクセント辞典』第22刷 東京堂出版
- 平山輝男編 (1992~1994)『現代日本語方言大辞典』第1巻～第8巻 明治書院
- 村中淑子(1999)「京阪式の3拍名詞アクセントの実態について－非共通語化と共通語化－」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』第7号 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター
- 村中淑子 (2005)「大阪における3拍名詞のアクセント－東大阪市100人調査の結果より－」『姫路獨協大学外国語学部紀要』18 姫路獨協大学